シーツの上に押さえつけられた跡だ。
跡をつけるなと言ったのに。
独り言とうらはらに、グレイは手首のそれに唇を寄せた。
眼の奥に力をこめる。
懐かしいと思ったのは俺だけだった。彼は抱き慣れた身体を抱いただけだ。
俺だって楽しんだ。薄情だなどと思うのは、筋違いもいいところだ。
服を着ることもせず、奥歯を噛み締めた。瞼を閉じて、胸を押さえる。
ようやく眼を開いた時、部屋の扉が開く音がした。
弾かれるように顔を向けると、
「お？　ようやくお目覚めか」
笑いを含んだ低い声がした。
「どうした？　そんな顔して」
ホークはグレイの顔を見て、ぎょっとしたように寝台へ歩み寄った。
「なんでもない」
「先に行ったと思ったのか」
灰色の前髪を子どもにするように掻きませられる。
「違う」
鬱陶しげにいったものの、髪に触れる手は快かった。
「一人にしたりしねえよ。――それにまだ時間はあるだろ」
もう遅い。グレイは叫びたかった。
このままホークと一緒に宿を出て、ウソの町を出て、メルビルまで？　別れるのが遅くなればなるほど、未練がつのるのはわかりきっていた。ホークから別れの言葉を言われて、俺の心臓は凍らずにいられるだろうか。
シーツの上で手を握り締める。関節が白くるほど力を込めた指を見ていると、ホークが肩に触れ

た。
「グレイ」
遠慮がちに肩先を掌で覆い、おずおずと抱き寄せられる。寝台に片膝を乗せる、軋んだ音が響いた。
「……レイディラックに来ねえか」
心臓が跳ねた。つかまれている裸の肩先が熱くなって、じんじんと痺れてくる。
誘いの言葉は、別れを告げた時にもいわれた言葉と同じだ。
あの時も、新しいレイディラックに来いと、一緒に海を巡ろうと、真剣な瞳でいわれたのだ。
いっときの遊びではなかった。ホークは、俺を伴侶にと考えてくれたのだ。
それで充分だ。
「またその話か」
気持ちを悟られないために、下を向いたまま低く答えを返す。
「俺は海には行かない」
「船酔いなら心配すんな。すぐに慣れる。それに船酔いにならないコツを教えてやるぜ。俺だけじゃねえ、ゲラ＝ハや手下どもも……」
「お前にはついて行かない」
ホークは力なくグレイの肩から手を離した。
「そんなに俺が――」
言いかけて、口をつぐんだ。軽いため息の音が聞こえた。
「わかったよ。しつこくして悪かったな。もうこの話はしねえ」
ホークは寝台を降りた。
弾む心臓が急速に静まって行く。胸がすっと冷える。
自分自身が望んだことだ。一時の感情に流されてもろくなことはない。ホークも自分もずっと自由きままに生きてきた。二人が伴侶としてそばにいて、うまくやっていけるはずがない。